著 順 田 川

歌悲の朝野吉

篇 續

東京

第一書

吉野朝の悲歌

續篇

昭和十四年二月廿五日初刷二千部發行
昭和十四年四月一日第二刷一千部發行
定價金一圓五十錢

著作者　川田順

東京市麴町區三番町一
刊行者　長谷川巳之吉

東京市麴町區三番町一
刊行所　第一書房
振替東京六四二二三
電話九段一四一五
三三四四

東京市神田區鍛倉町一一ノ七
印刷者　阿部喜太郎

滿洲・朝鮮・臺灣・樺太等の
外地定價一圓六十五錢

序

國史を通覽するに、吉野朝諸天子諸皇子の御艱苦ほど我等の義憤を促すものなく、吉野朝廷を擁護し奉つた公卿武臣等の忠烈ほど我等の感激を唆るものはない。興國・正平を中葉として前後六十年に亙る哀史は、日本國が非常時に際會する毎に、國民によつて、必ず、常に、新しく回顧せられねばならぬ。

私が微力を致し、禿筆を呵して、先づ「吉野朝の悲歌」を書き、尋いで「吉野朝柱石宗良親王」を公にしたのも、烏滸がましいが、此の「回顧」をなさんが爲めであつた。吉野朝に對する私の景慕は未だ盡きず、ここに更めて續篇一卷を書き、三部作を完成するに到らしめた。

おそらく、これで、吉野朝悲歌を集成し得たのでは無からう乎と愚考する。

昭和十四年二月十一日

川田順

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

緒言……一一

○

一　後醍醐天皇御製十首……一七
二　後村上天皇御製六首……二九
三　長慶天皇御製七首……三五
四　後圓融天皇御製二首……四二
　　親王御歌二首……四五
六　世尊親王御歌一首……四八
七　宗尊親王御歌十五首……五〇

八　恒良親王御歌一首……六六
九　懐良親王御歌一首……六九
一〇　呆尊法親王御歌一首……七一
一一　無文元選御歌一首……七二
一二　仁譽法親王御歌一首……七四
一三　聖尊法親王御歌一首……七五
一四　尹良親王御歌一首……七七
一五　自天王御歌一首……七九
○
一六　新待賢門院御歌一首……八一
一七　尊良親王妃御歌一首……八三
一八　宣政門院御歌一首……八五
一九　嘉喜門院御歌三首……八七
二〇　長慶天皇中宮御歌一首……九〇
二一　贈從三位爲子御歌一首……九一

○

二二 源具行三首……九三
二三 花山院師賢十一首……九六
二四 菊池武時一首……一〇九
二五 一條行房一首……一一一
二六 源重泰一首……一一三
二七 坊門清忠一首……一一五
二八 萬里小路藤房二首……一一七
二九 松翁一首……一二一
三〇 藤原實躬二首……一二四
三一 齋藤基任一首……一二六
三二 讀人不知一首……一二九
三三 四條隆資一首……一三一
三四 近衞經忠一首……一三三
三五 津守國夏一首……一三五

三六　北畠親房十七首……一三八
三七　花山院家賢二首……一五六
三八　西園寺公重一首……一五八
三九　洞院公泰四首……一六一
四〇　權大納言時經一首……一六四
四一　藤原忠成一首……一六五
四二　大僧正賴意二首……一六七
四三　二條教基一首……一七〇
四四　二條冬實二首……一七二
四五　藤原師兼四首……一七四
四六　藤原實興一首……一七九
四七　藤原光資一首……一八一
四八　藤原經高一首……一八三
四九　足利成直一首……一八五
五〇　源賴武一首……一八七

五一　行脚僧二首……一八九
五二　北畠顯能二首……一九二
五三　吉田宗房一首……一九四
五四　吉田守房一首……一九六
五五　二條爲忠一首……一九八
五六　津守國量一首……二〇〇
五七　花山院長親十一首……二〇一
五八　楠木光正三首……二一二
五九　文屋將監一首……二一五

○

六〇　花山院師賢室一首……二一六
六一　北畠顯家室一首……二一八
六二　勾當內侍一首……二二〇
六三　藤原實勝室一首……二二一
六四　花山院長親母二首……二二三

六五　妙光寺內大臣家中納言一首……二二六
○
愛國歌の保存……二二七
吉野朝雜錄……二四四
○
吉野朝悲歌總索引……二八五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

吉野朝の悲歌續篇

緒言

支那事變は國民の肚裏に長期戰の覺悟を据ゑしめ、既に第四期作戰に入つた。昨昭和十三年二月上梓の小著「吉野朝の悲歌」は第一期作戰の長城戰及び上海戰の最中に書かれ、同年七月刊行の「吉野朝桂石宗良親王」は第二期作戰なる徐州包圍戰の前後に書かれたものであつた。さうして、第三冊目の本書は第三期作戰武漢攻略の前驅なる潛山の激戰が行はれた七月上旬に執筆を開始したものである。皇軍の驥尾に附して、吉野朝の精神史を研究させていただく現在の私は、忝い境涯だと感謝せねばならぬ。

本書は、前ともに、「吉野朝の悲歌」の續篇である。研究の態度、及び內容排列の方法は、正篇と變る所無い。吉野朝廷君臣の「悲歌」、すなはち直接又は間接に當年の時局に卽して

境涯を吐漏した和歌――それらを紹介し評釋するのが本書の目的であつて、一般花鳥風月の詠は關する所で無い。既に屢々論述した如く、當年の和歌の文學的乃至歴史的價値は「悲歌」にのみ依存するのである。

本書に摘錄し註釋した悲歌は、作者六十五人・一百五十七首。これを依據の文獻別にすれば如左。

新葉集、六十二首。
李花集、二十一首。
天授五百番、十四首。
[illegible]　六首。
吉野拾　〃　六首。
嘉喜門　御集、五首。
臨永集　四首。

師兼卿千首、四首。
看聞日記、三首。
新千載集、二首。
新續古今集、二首。
宗良親王御千首、二首。
熙成親王御千首、一首。
玉葉集、一首。
風雅集、一首。
新拾遺集、一首。
新後拾遺集、一首。
藤葉集、一首。
賣児葉集、一首。
目。
ヲ[illegible]ナ[illegible]ナ[illegible]記、一首。
金勝院十八平記、一首。

其他、七首。

合計、一百五十七首。

新葉集が當年の和歌資料中、最も重要のものなること言ふ迄もない。それで、たとひ他の歌集・歌合・物語類に所見の歌でも、新葉集所載のものは、皆それへ合算したので、六十二首の多きに上つた。本書に謹解の宗良親王御歌は十五首なるに、李花集（親王の御家集）二十一首とは如何と疑問が起るであらう。それは、李花集詞書の中に含まれたる北畠親房の作十一首を採つた爲めである。

作者六十五人中、正篇既出の人々が多數を占めてゐる事は續篇の性質上已むを得ない。それでも、世良親王・恒良親王・杲尊法親王・無文元選・尹良親王・自天王・尊良親王妃・宣政門院・贈從三位爲子・源重泰・松翁・藤原實躬・齋藤基任・讀人不知・近衞經忠・大納言時經・藤原忠成・藤原光資・藤原經高・行脚僧・北畠顯能・吉田守房・津守國量・楠木光正・文屋將監・勾當內侍・藤原實勝室・妙光寺內大臣家中納言の二十八人は本書に初見の作者である。又、本書所錄の和歌の價値を通觀するに、人口に膾炙したものは、自然、殆ど皆正篇に採り盡くされてゐるので、此の點から大衆的興味は劣るであらう。乍然、歌そのものの出來榮えから申せ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.